

汪倫おうりんに贈おくる（李白りはく）

李白乘舟躋欲行 忽聞岸上踏歌聲
桃花潭水深千尺 不及汪倫送我情

李白りはく 舟ふねに 乗のつて 將まさに 行ゆかんと 欲ほつす

解説 李白五十五歳のとき、桃花潭に遊び、そこで、村人の汪倫に、いつも美酒をふるまってもらった。李白はそのお礼として別れに際し、汪倫に贈ったのがこの詩である。

忽たちまち 聞きく 岸上がんじょう 踏歌とうかの 声こえ

語釈 ※將欲Ⅱくをしようとする事。※忽聞Ⅱふと聞こえる。※踏歌Ⅱ足をふんで調子を取って歌う事。※桃花潭Ⅱ安徽省涇県けいけんにあるふちの名。

桃花とうか 潭水たんすい 深ふかさ 千尺せんじやく

通釈 私が舟に乗り、いよいよ出発しようすると、ふと岸

及およばず 汪倫おうりんが 我われを 送おくるの 情じょうに

辺で足を踏んで調子を取りながら歌う声が聞こえてきた。汪倫が、私との別れを惜しんで見送りに来たのだ。この桃花潭の深さは千尺もあると思われるほど深い。汪倫の情の深さにはとても及ばない。